

PREVENTION No. 177

平成19年5月17日開催

「一人息子が飲酒運転の犠牲になって・・・振り返って今」 鈴木 共子

「共子さん、餃子作っておいたよ。俺、今日これからIと会うんだよ。もしかしてIが泊まるかも」と、息子・零から仕事場に携帯から連絡が入ったのは夕方。「いくら遅くなったからって、迎えに来いなんて言わないでよ。私だって仕事で疲れている。歩いて帰れない距離じゃないんだし、零君、あなたはまだ大学生なんだからね。いつまでも甘えないでよ」と、少しきつく言った私。「はい、はい。解っていますよ。迎えに来てなんて言わないよ。じゃあね」と、うんざりしたように答えた息子。日常のいつも交わされる何気ない会話。それが息子と私の最後の会話になろうとは・・・。

息子は親友のI君と夜中過ぎ我が家に向かう途中で、背後から来た飲酒・無免許・無車検・無保険・スピード違反の悪質運転の暴走車に突っ込まれ、二人とも生命を奪われた。

ちょうど事故現場が橋の上で、息子は飛ばされて19メートル下のグラウンドのコンクリートの土手に叩きつけられたのだ。今から7年前のことである。

迎えにさえ行っていればこんなことにならなかったと、私は自分を責め続けた。あの時の息子との会話が頭をよぎり、自分の発した言葉がまるで刃のように私の心に突き刺さる。

それだけではなかった。息子が飲酒運転の犠牲者になったということで、私はまた自分を責めたのだ。なぜなら私は当時「ちょっとくらいなら大丈夫」と飲酒運転をしていたからだ。幸いそれまで事故を起こすことは無かったけれど、飲酒運転をしていた事実は消せない。「罰が当たった!」と、気が狂うばかりだった。「ごめんね・・・ごめんね・・・ごめんね・・・」と、物言わぬ息子の前で私は震えていた。息子を守れぬどころか、私は我が子を殺したも同じじゃないか・・・。誰しもが愛するものの理不尽な死を前にすると、原因がはっきりしているにも関わらず、自分を責める要因を強いて見つけ出すものである。私はまさにそうだった。自分を責めることに耐え切れなくなった時、今度は怒涛のごとくの怒りの感情が沸き起こってきた。

今思うと、その時の私は自分を責めること、あるいは怒ることで、無意識にショックを鈍麻させ、息子の死と向き合うことを避けていたのではと思う。その怒りが、加害者の裁かれる刑のあまりの軽さにヒートアップしていくのは、自然の成り行きだったかもしれない。「悪質ドライバーの量刑の見直し」を求めての署名活動は私の持って行き場のない怒りの矛先となっていく。私だけではない。それまで泣き寝入りに等しい状況に置かれていた全国の交通事故遺族たちの悲しさ、悔しさ、怒りというマイナス感情が膨大なエネルギーとなって、「危険運転致死傷罪」を成立させたのだ。市民の勝利のはずであった。だが法律施行から5年。私たちの勝ち取ったはずの法はなかなか適用されてはいない。あまりに抽象的過ぎる「危険運転致死傷罪」の構成要件が、適用を困難にさせていると聞く。当時も専門家であればこの法律の不備を誰しもが気づいていたという。私は法律のことは解らないが、法務省の役人や法律家と言われる専門家たちの生命に対しての感覚に疑問を覚えている。生命を語る時は、一般論で語ってほしくない。大切な人の生命のこととして語るのであれば、生命が守れる法律を作ることが出来るはずが無いのだと思う。

怒りが当時の私を生かしたといっても過言ではないが、怒りを保つことは難しい。怒ることはエネルギーを消耗させることだ。とても疲れることである。どこかで安らぎを求めている自分を意識する。

そこで生まれてきたのが「生命のメッセージ展」の取り組みである。事件事故の現実と生命の重みを伝えようと、犠牲者の等身大の人型に故人の写真と遺族の綴ったメッセージを取り付け、足元に遺品の靴を置くというアート展である。「署名活動」をハードとするならば、「生命のメッセージ展」はソフトな活動と言えるだろう。もちろん無念さが先立つものではあるが、根底にあるのは、犠牲になった者たちへの愛、そして遺された者たちへの愛である。理不尽に生命を奪われた愛する家族が、生命の大切さを伝えるメッセンジャーとなって新たな生命を生きるという物語は私たちを癒してくれるのだ。

息子の事故から7年2ヶ月・・・ただ夢中で生きてきたと思う。ふと振り返ると、一筋の道が出来ていた。息子を理不尽に喪ってからの心の旅路といってよい。慟哭の日々ではあったが、そんな日々にも喜びがあった。それは人と出会いだ。事故後心を閉ざした私は、多くの友人たちを失ったが、それ以上の濃密な出会いをしている。そのひとつに映画監督S氏との出会いがあった。その結果、私の半生が映画になることになった。この5月から公開されている。主に自主上映という形をとるものであるが、試写会等を終え反響は大きいようだ。クルマ社会への警告でもあり、特に飲酒運転によって引き起こす悲劇を伝えているが、それだけではない。ひとりの母親の生き様を通して、生きること、家族愛そして人とつながるということをテーマとしている。「0（ゼロ）からの風」とタイトルされたこの映画は、もちろんフィクションである。ただ息子の名前、零はそのままだ。まさに息子は映画の中で甦るといってよい。映画の中で息子の名前が呼ばれる度に心がうずき、複雑な心境であるが、一人でも多くの人に観て頂き、「飲酒運転撲滅」を目指したい。

息子役のT君は見事に息子を演じてくれた。そのT君から「母の日」にカーネーションの花束が届いたのだ。その感動は言葉で表現できない。本当に息子からプレゼントされたようで花束を抱きすくめ思わず号泣してしまった。「共子さん、ありがとう。俺はあなたの中に生きている」と、息子の語り口を想像して・・・。

「死者は無力ではない」というアメリカ原住民の言葉を実感している。人は死んだら終わりなのではない。死者は死を生き活きと生きていると思いたい。現に私は息子と共に生きている。姿なき息子・零と共に生きている。想像力を駆使して息子と対話をしているのだが、それは息子からのメッセージであるに違いない。何よりメッセージであると受け止められる柔らかな感性が自分にあることを感謝したい。

息子の生きたであろう人生をトレースしたいと、息子が通うはずだった早稲田大学に三度目の挑戦で入学したが、この春私は卒業した。学ぶ喜び、またたくさんの若者たちとの出会い、実り多き4年間だったと思う。何より息子からの最高のプレゼントだったと感慨浸ることの多いこの頃である。

息子の作った餃子が冷凍庫の中でカチカチに凍っている。餃子は息子が生きていた証のひとつ。その餃子はまるで息子の凍結された遺伝子のような。私は研究者さながらに、ずっと保管していくのだろうか。それとも解凍して食べる日が来るのだろうか。今は何とも言えない。けれど南アフリカのシンガーが「醜い白人は私たちのすべてを奪ったが、この声だけは奪えなかった」と歌っているのを聴いて、自分を重ね合わせ「運命は私のすべてを奪ったが、私が私であることを奪えなかった」と、いつの日か高らかに歌ってみたい。